

顎下腺に発生した顆粒細胞腫の1例

◎大塚 百華¹⁾、河原 明彦¹⁾、安倍 秀幸¹⁾、高瀬 頼妃呼¹⁾、村田 和也¹⁾、牧野 諒央¹⁾、熊谷 天斗¹⁾、黒木 日菜子¹⁾
久留米大学病院 病理診断科・病理部¹⁾

【はじめに】顆粒細胞腫は、顆粒細胞性筋芽細胞腫として報告されたが、免疫組織化学や電子顕微鏡所見より、末梢神経（Schwann 細胞）由来を示唆する研究結果が多い。本腫瘍の多くは舌に発生し、その他全身のあらゆる組織に発生する。本腫瘍の多くは良性腫瘍であるが、稀に遠隔転移を来した症例の報告もある。顎下腺に発生した本腫瘍の細胞学的報告は、我々が検索した限りみられない。今回、われわれは顎下部に発生した顆粒細胞腫の1例を経験したので報告する。

【症例】30歳代、女性。右顎下部に腫瘤を自覚し、前医を受診した。MRIにて右顎下部に約20mm大の境界明瞭な腫瘤が認められ、精査加療目的で当院に紹介受診された。穿刺吸引細胞が施行され、その後顎下腺摘出術が施行された。

【細胞所見】比較的清浄な背景に腫瘍細胞がシート状あるいは孤立散在性に出現していた。腫瘍細胞は全体的に細胞境界が不明瞭で、結合性は乏しく、ライトグリーン淡染性の豊富な顆粒状細胞質を有していた。一部に細胞質内の顆粒物質が飛散した所見が認められた。腫瘍細胞は軽度の大

小不同がみられ、核偏在性を呈していた。腫瘍細胞の核は、微細顆粒状のクロマチンパターンを呈し、好酸性の核小体を有していた。また一部の細胞に核内封入体が認められた。本症例の細胞診断は好酸性腫瘍や顆粒細胞腫などの良性腫瘍などが鑑別に挙がり、意義不明な異型（ミラノシステム：AUS）と判定した。

【肉眼および組織所見】摘出された腫瘍は2.0×1.0mm大で、断面は平滑で乳白色調を呈していた。腫瘍は充実性に増生し、腺房組織との境界は明瞭であった。腫瘍細胞は豊富な細胞質内に好酸性顆粒を有しており、核は小型で異型はみられなかった。免疫組織化学において腫瘍細胞はS100とCD68の発現を認めた。以上より顆粒細胞腫と診断した。

【まとめ】顎下腺から発生する腫瘍のほとんどは唾液腺腫瘍であるが、顆粒細胞腫の約半数は頭頸部に発生するため、臨床細胞学的特徴を理解して細胞診断することが肝要である。本報告にあたり御指導いただいた久留米大学病院 病理診断科・病理部 秋葉 純先生に深謝いたします。

連絡先：0942-31-7651